読上競技コレクション #1

New 新連載

一人二役モデル

北海道　西村　友幸

ユニフォームを脱ぐ時が来た。長年の愛用品だから未練があることは百も承知している。だが、その服は機能性の点で今日のわれわれの要求水準を満たせなくなっている。耐用年数はとうに超過し、あちこちにほころびも目立つ。おまけにダサいときている。もっと素敵な服に着替えて、次のステージへ踏み出す時が来たのだ。

本シリーズでは、私がデザインを手がけた読上競技の最新コレクションを披露する。ただし、オープニングを飾る今回の「一人二役モデル」だけは既発表作品であることをお断りしておく。10年前にこのモデルが初登場した際には、あまりにも前衛的で実用には供さないと受け取られた。だが、ここ10年の間に状況は一変した。「新しいワインは新しい革袋に」と言う。2010年代の珠算界は新しい革袋をせっせと、しかしおそらく知らず知らずのうちに用意した。機は熟したのである。

業界常識に挑む

今から10年前、私は「読上競技は一人二役で」と題する論文（『サンライズ』2010年5月号）を世に送り出した。論文の第一節の見出しは、2000年代の世界的ベストセラー『ブルー・オーシャン戦略』に触発されて「業界常識に挑む」とした。同書によれば、未知の市場空間（ブルー・オーシャン）を切り拓くための最重要の問いの1つが、「業界常識として製品やサービスに備わっている要素のうち、取り除くべきものは何か」である。読上競技にあって当然だが、実はないほうがよい要素はいったい何か。

この問いは即答できるほど単純なものではなかった。だが、問いを立てるまでに要した年月を勘案すると、答えは問いに手を引かれてやってきたも同然であった。解が浮かんだときはうれしさのあまり、ある人に携帯メールで「できた！」と告げた。2009年2月のことである。相手は何のことかわからなかったはずだが、そこはさるもの、すかさず「おめでとうございます。どれくらいかかったんですか」と返事をよこしてくれた。

「17年」――私はそう答えた。この年数は珠算から遠ざかっていた期間を相当含んでいるが、業界常識を打ち破るアウトサイダー的視点が手に入ったのだとすれば、長いブランクもあながち無駄だったとは言えまい。

> 読上競技は「読み手」を欠くと成り立たないが、この役目を競技委員が引き受けなければならないのかというと、必ずしもそうではない。「置き手」である選手が、代わる代わる読み手を務めるというやり方もあるのだ。

拙稿では、前掲の見出し「業界常識に挑む」に続く本文がこのような書き出しで始まる。今見ても十分にセンセーショナルだ。

競技方法

この読上競技に参加する選手は問題を1問ずつ読み上げる。よって、参加者が10名の場合、問題は全部で10問読み上げられる。各選手とも、1問は読み手として、残りの9問は置き手として、競

技に関わることになる。

A 選手が読み手を務めたとき、9 名の置き手のうち 4 名が正答したとする。A は「読み点」として$\sqrt{4}$ = 2 点を獲得する。一方、正答した 4 名の置き手はそれぞれ、「置き点」として$\sqrt{1/4}$ = 0.5 点を獲得する。誤答した残り 5 名の置き手の置き点はもちろん 0 点である。以上の例示のとおり、正答者数を N とすると、その問題の読み手に与えられる読み点は$\sqrt{N}$、正答した置き手一人ひとりに与えられる置き点は$\sqrt{1/N}$である。

各選手は、自分が読み手を務める問題以外の 9 問では置き手の立場に回る。問題ごとに、誤答の場合には 0 点、正答の場合には上記のとおり$\sqrt{1/N}$を置き点として受け取る。

競技終了後、各選手の

総合点＝読み点＋置き点合計

を計算して順位を決める。高得点のほうが上位である。したがって、選手は置き手としてできるかぎり多くの問題を正答する一方で、読み手としてできるかぎり多くの置き手から正答を引き出そうとする。置き手にとって置きやすく、それゆえ合わせやすいような読み方ができる者こそが上手な読み手である。10 年前の拙稿に込められたこのような価値観も、あるいは当時の業界常識に反するものであったかもしれない。

こうした新しいスタイルの読上競技を成立させるためには、少なくとも以下 2 つのルールが必要である。第一に、各選手が読み手として読み上げる問題の難易度は均一でなければならない。第二に、読み点を稼ぐための「遅読み」防止策として制限時間を設定し、読み手がこれを超過した場合にはペナルティを課さなければならない。

新しい革袋

一人二役モデルを着想した翌月の 2009 年 3 月 6 日、私は釧路発札幌行きの特急「スーパーおおぞら」に乗り込んだ。なぜかこの日に限って指定席を取っていなかったので、自由席車両へ向かった。窓側の席はすでに全部埋まっていた。通路側の適当な席に座った。隣の窓側の席の乗客が気になって視線を向けた。やはりそうだ。近影が『サンライズ』に載っていたので本人だとわかった。実に 12 年ぶりの再会であった。

札幌までの 4 時間の道中、われわれは旧交を温め、珠算談議に花を咲かせた。タイミングを見計らって私はこう切り出した。

「読上競技のやり方がやっとわかった。選手が読めばいいんだよ」

「いい！」という笑い声が返ってきた。ただし彼は、選手が読み手を無事に務められるのかについては半信半疑の様子であった。

10 年前の拙稿では、一人二役モデルのイメージを読者につかんでもらうために、大塚選手と玉山選手の二人が登場するストーリーをシナリオ仕立てで展開した。今ここに、登場人物の名前を改めてストーリーを再生することにしたい。

司会者「第 1 問。読み手、大関プロ」
大　関「願いましては…（中略）…円では」
（大関プロに対して拍手と歓声）
司会者「答えをお願いします」
大　関「ただいまの答えは…円です」
司会者「正答者は挙手をします」
（正答者に対して拍手と歓声）
司会者「第 2 問。読み手、若松プロ」
若　松「願いましては…（以下同様）」

あの日、偶然隣り合った若松尚弘は夢を語った。後年その夢を実現し、珠算で生計を立てる「プロ」へと転向した。プロの選手にならば安心して置き手と読み手の二役を任せられる。大関プロに若松プロ、他にも工藤プロ、土屋プロ、吉本プロ…。役者は揃った。近い将来、珠算のプロリーグが発足し、そこに一人二役モデルが颯爽と現れる日が来ると信じたい。夢はかなうものなのである。

次回は「算読連携モデル」を紹介する。

（小樽商科大学大学院教授）